

## 誌上行学講習会

高佐日焯上人

あえて説明をぬきにいたします。一応名前だけあげておきます。ただ唯識は人間の心を九つに分けておくと、順序について少し申し上げたい。そこでこの順序について少し申し上げます。眼、耳、鼻、舌、は御承知の通り、身と一緒のものをさわった感じであり、これを一般には五官、即ち五つの感覚と言います。これを成所作智と呼びます。成所作智とは、何をすることも五官を使わなければ成らない、あらゆるものを知らずともなる。すべてを成している根本の智になるという意味であります。確かに眼が見えなくて、耳が聞こえない、鼻がきかない、味が解らない、全身マヒしているでは、ただ生きています。という事になってしまします。ですから人間は五官なしにはものを知ることが出来ないとあります。次に第六識を意識といいますが、意識とは、我々の眼のさめておるときに、妙とは不思議のことですが、その不思議なものを観察することの出来る智慧をいいます。しかしこれは実際にはもっと深いところで知ることです。この用語は「考を要するようであり、むしろ思惟観察（物を考えたりみたりすること）」といいた方がよい。第七識を抹那識（まなしき）とい、これは我識、執識（しゅうしき）と訳されてお、平等察智と言われています。

我にとらわれるという事は誰でも平等、あたりまえだといふのでありましょう。どんなにえらい人でも、つまらん人でもとにかく自分を中心にして考えるように、心がそう出来ているというわけであり、第八識は阿羅耶識（あらかやしき）これは蔵識と約され、すべはこの中から出てくるのだという考え方があります。第九識は阿摩羅識（あまらしき）、これは真淨識と言われ、本當にきよらかな心と約され、法界体性智と呼ばれています。法界とは天地自然、事々物々、森羅万象、一切合切のこと、それらの一番の元になる心を指すわけであり、第七、八、九の識は絶対的でない。やすまない。昼夜瀑流の如く活動してやまない。このように唯識は教えるのであります。第七識の抹那識とは何でも自分本位に、おもったことをやりたい心のことでありますから、身勝手なことをやりたいの心のこと、これがここに止どまっていれたいが、そのいきおい、悪臭は第八識にまで移ってしまう。しみ込んでしまう。するとこの八識はすべてを現れ、いゆる社会に罪障を残す現象となつて現れる。第九識の阿摩羅識は真淨識（心）であり、断じてその悪臭にそまらぬ。絶対真の心である。以上のような考え方が世親菩薩の「唯識観」であります。

(以下次号)